

Jリーグオフィシャルスポンサー 主催イベントに協力

リーグ戦がスタートし、サッカー界に活気が戻ってきた春、Jリーグオフィシャルスポンサーの主催するさまざまなイベントも各地で行われ、JリーグやJクラブが協力した。各社がそれぞれの特色を生かした内容に、JリーグやJクラブがコラボレート。大いに楽しみ、学び、体を動かして充実した時を過ごした参加者の、満足そうな表情がイベントの成功を物語っていた。

「キャンノ Jリーグミュージアム2009 in 品川 ～興奮との再会・レンズがみた、熱狂のスタジアム～」

3月16日～4月4日、東京都のキャンノ Sタワー2階 オープンギャラリーで「キャンノ Jリーグミュージアム2009 in 品川～興奮との再会・レンズがみた、熱狂のスタジアム～」が開催された。今年で6回目を迎えたイベントで、Jリーグオフィシャルフォトグラファーが撮影した150点以上に及ぶ迫力ある写真によって、Jリーグで繰り広げられる筋書きのないドラマを再現した。



©J.LEAGUE PHOTOS
多くの人々が来場し、展示された写真に見入った



©J.LEAGUE PHOTOS
宮澤さん(左)、小倉さん(中央)、週刊サッカーマガジンの北條聡編集長(右)によるトークイベント

また、写真の展示以外にも、サッカー専門誌「週刊サッカーマガジン」とのコラボレーションによるさまざまな企画が実施された。3月19日には、JリーグOB選手の宮澤ミッシェルさん、小倉隆史さんをゲストに招いたトークイベントも行われ、多くの入場者でにぎわった。

「街をきれいに、街を笑顔に。」 ホームタウンみんなで清掃プロジェクト



©J.LEAGUE PHOTOS
自動販売機の下まで清掃する徹底ぶり

Jリーグオフィシャルスポンサーのレオパレス21が主催する「街をきれいに、街を笑顔に。」ホームタウンみんなで清掃プロジェクトの、今年第1回目が神奈川県横浜市で開催された。市内の小学3、4年とその保護者、43組86名が参加して、美化活動に取り組み、サッカー教室、Jリーグの試合観戦を楽しんだ。

開会式の後、参加者は日産スタジアムから新横浜駅周辺に繰り出してみかじめ。町内会の清掃が行き届いており、ごみは少なかったが、子供たちは一生懸命に活動した。約1時間後、集めたごみを手に再集合し、分別も行った。小学3年の男子と共に参加した父親は「街をきれいにすると意識づけのためにも、いい取り組み」と感想を述べていた。



©J.LEAGUE PHOTOS
活動の成果を前に日産スタジアムで記念撮影

「アイテムしごとと探検隊」



©J.LEAGUE PHOTOS
「しごと」について見聞を広めた子供たち

子供たちが「しごと」の現場を訪れ、仕事や働くことへの知識・理解を深めることを目的に行われる「アイテムしごとと探検隊」が、今年も3月27日にJリーグ事務局(JFAハウス)で実施された。首都圏の小学4、5年の男女児童20名が、サッカー関連の仕事に従事する方々の話を聞いた後、Jリーグ事務局やJリーグ関連会社の訪問、そして日本サッカーミュージアム見学と有意義な時を過ごした。

子供たちの「しごと」の話に耳を傾ける表情は真剣そのもの。「チェアマンの話が聞くことができてよかった」と声を弾ませた、サッカーが大好きという小学5年の女子もいた。そして、たくさんのお土産に歓声を上げながら、JFAハウスを後にした。



©J.LEAGUE PHOTOS
鬼武Jリーグチェアマンの話聴き、熱心にメモを取る

カルビー×Jリーグ 「キッズファンサッカー」

福岡フットボールセンターで4月4日、カルビー×Jリーグ「キッズファンサッカー」が行われた。小学3、4年の児童とその保護者、約60名が参加。家族と触れ合いながら、食について学び、ボールに触れる楽しさを味わった。



じゃがいもやポテトチップスについて新たな発見

開会式後の「じゃがいも教室」では、身近な食材であるじゃがいもや、ポテトチップスについて、クイズ形式で知識を身に付けた。その後、アビスパ福岡のホームタウン推進部コーチが指導するサッカー教室に参加。頭



あこがれの城彰さんと接し、子供たちも大満足

を使った後は、保護者と共に思い切り体を動かした。参加者と一緒にボールを追いかけたJリーグ百年構想メッセンジャーの城彰さんは、「みんな楽しく一生懸命参加してくれて、本当にいい姿だった」と、楽しい時間を振り返った。

2009年度スポーツ振興活動 第1期申請分の支援を決定

Jリーグは毎年、各Jクラブが実施するサッカー以外のスポーツ振興活動に対して支援を行っているが、2009年度第1期申請分(2009年3月17日申請締切)につき62件の支援を決定した。第2期申請は5月15日締切にて受け付ける予定。

2009年度 スポーツ振興活動支援 第1期承認一覧(2009年4月21日現在)

No.	クラブ名	行事名	対象種目	形式	参加対象者	開催期間	場所
1	札幌	第6期コンサドレ札幌スポーツスター in Fu's	ウオーキング、登山、MTB、フットサル、ラン、ボクシング、スキー、スノーボード、スノーシュー、スケートなど	教室	原則、小学3~6年	7月~2010年2月(月2回)	札幌市篠野野外スポーツ交流施設および周辺地域
2		コンサドレ札幌スキーアカデミー in KIRORO 2009	スキー	教室、大会	小学生	4月11、12日	キロロ スノーワールド
3	仙台	ベガルタ仙台 ソフトテニス教室およびソフトテニス指導者教室	ソフトテニス	教室	宮城県中学・高校ソフトテニス指導者ならびに中学・高校ソフトテニス選手	夏休み・冬休み期間各2回	宮城県内庭球場
4		ベガルタ仙台 バリアフリーサッカー教室	障がい者サッカー(電動車椅子サッカー、視覚障がい者サッカー、脳性麻痺サッカー、知的障がい者サッカー)	教室	宮城県内の障がい者	5月~2010年1月(月2回)	宮城県内
5	山形	女子駅伝事業	駅伝	教室、チーム	教室：小学5、6年~中学生	通年	山形県内 他
6	鹿島	鹿島アントラーズ剣道教室	剣道	教室	小学1年~中学3年	通年	鹿島神宮道場およびカシマスポーツセンター剣道場
7		第11回鹿島アントラーズ杯ミニバスケットボール大会	バスケットボール	大会	小学生	12月12、13日	カシマスポーツセンター
8	水戸	水戸ホーリーホック バレーボール教室	バレーボール	教室	小・中学生	4月~2010年3月(週2回)	茨城県職業人材育成センター体育館
9		第3回ホーリーカップハンディキャップサッカーフェスティバル	障がい者サッカー	大会	小学生以上	8月9日	水戸市ツインフィールド
10		チアリーディング事業	チアリーディング	教室	未就学児~小学生	4月~2010年3月	シダックス水戸西原
11	草津	ザバス草津2009ファイトカップ群馬県知的障がい者サッカー大会	障がい者サッカー	大会	群馬県内の養護学校生、養護学校卒業生または社会福祉施設利用者からなるチーム	7月26日	サンデンフットボールパーク
12		レッズ・フレンドリー・フットサルリーグ[MIX]、[OVER40]	フットサル	大会	[MIX] 18歳以上で女性2名以上含む、[OVER40] 30歳以上で40歳以上2名含む	4~12月(期間中週2回)	レッズランドフットサルコート
13	浦和	レッズランド ウォーキングプロジェクト	ウォーキング	教室	18歳以上	4月9日~7月2日(全12回)	レッズランドハウス2Fおよびフィールド周辺エリア
14		レッズランドテニススクール	テニス	教室	キッズ(年中・年長)~一般	通年(週3回)	レッズランド内テニスコート
15		ランニングスクール	ランニング	教室	小学生以上	通年(週1~2回) ※8月は開催なし	レッズランドハウス2Fおよびフィールド周辺エリア
16	千葉	第9回 夏休み親子スポーツ合宿	サッカー、キャンプ、ゴルフ	教室	親子	8月22~23日	日本エアロビクスセンター、千葉市少年自然の家
17		サッカー&フラッグフットボールイベント	サッカー、フラッグフットボール	教室	小学生	7月29日	フクダ電子スクエア
18		第35回秋季家庭婦人バレーボール大会	バレーボール	大会	市原市家庭婦人バレーボール連盟に登録しているチーム	10~11月(2日間)	市原臨海体育館
19	F東京	F C東京 バレーボールチーム	バレーボール	チーム	一般	通年	東京都内
20	東京V	第5回東京ヴェルディ稲城グリーン駅伝	駅伝	大会	一般、小学生、中学生、親子	5月6日	稲城中央公園総合グラウンドおよびその周辺
21		東京ヴェルディ トライアスロンチーム	トライアスロン	チーム	一般	通年	アクラブ稲城 他
22		東京ヴェルディ バレーボールチーム	バレーボール	チーム	一般	通年	東京都内
23	横浜FM	横浜 F・マリノス マリノススポーツチャレンジ	バドミントン、アウトリガーカヌー、スイムレース、ウインドサーフィン、ビーチサッカー	大会、教室	子供~一般	通年(5月以降)	材木座海岸、由比が浜海岸
24		横浜 F・マリノス フトゥーロ	障がい者サッカー	教室	満12歳以上(申込時)で受の手帳(療育手帳)の交付を受けている、あるいはその取得の対象に準ずる	通年	横浜F・マリノス タウン・しんよこフットボールパーク 他
25		湘南ベルマーレ ビーチバレーチーム	ビーチバレー	大会、教室、チーム	一般	通年	平塚ビーチパーク 他
26		湘南ベルマーレ トライアスロンチーム強化と普及 2009	トライアスロン	教室、チーム	一般	通年	湘南平塚ビーチパーク、湘入ふれあい公園 他
27	湘南	湘南ベルマーレ 女子ソフトボールチーム2009	ソフトボール	チーム、教室	一般	通年	厚木市および平塚市内、平塚馬入ふれあい公園 他
28		ベルマーレビーチサッカー大会およびビーチサッカー教室	ビーチサッカー	大会、教室	小学生~一般	4月~2010年3月(月2回)	湘南ひらつかビーチパーク
29		湘南ベルマーレスポーツクラブ オアシススイムスクール2009	オアシススイム	教室	プールで100m以上泳げる中学生以上の健康な男女	5月16日~10月10日(毎週土曜日)	湘南ひらつかビーチパーク
30		ベルマーレカップ2009 第20回小学生駅伝競走大会	駅伝	大会	ホームタウン内の小学4~6年	12月13日	平塚市総合公園
31	甲府	初心者フットサル教室(ハッピーフットサル)	フットサル	教室	幼児、女性、シニア、一般	5月~2010年3月	県下全域
32		アルビレックス新潟ゲートボール講習会	ゲートボール	教室	坂井輪地域の主婦および中高年者、小学生	5~12月 ※8月は除く	エスフリーフットサルコート、各学校、新潟市西総合スポーツセンター
33		アルビレックス杯争奪ゲートボール大会	ゲートボール	大会	新潟市および近郊のゲートボールチーム	6月4日	東北電力カスリーンフィールド
34		アルビレックス新潟ランニングクラブ合同ランニングクリニック	ランニング	教室	中学生以上の一般ランナー	4~7月(全15回)	東北電力カスリーンスタジアム、新潟市陸上競技場 他
35	新潟	アルビレックス新潟 フープクリニック	バスケットボール	教室	経験者、未経験者、指導者	6~12月(14回予定)	新潟県内体育館
36		アルビレックス新潟サマー&オースタムスキーレーシング2009	スキー(競技者向けオフレーシング)	教室	小学3年~一般までのアルペンスキー競技者	8月・10月	長岡市営スキー場
37		第6回アルビレックス杯争奪ゲートボール大会	ゲートボール	大会	新潟市内のゲートボール愛好者	7月20日	新潟市中央公園芝生広場
38		アルビレックス新潟スキーレーシングクリニック	スキー(アルペン競技)	教室	小学生・中学生・高校生のスキー競技者	2010年1~3月(全3回)	上中下越各地域のスキー場
39		アルビレックス新潟コンディショニングセミナー2009	スキー(アルペン競技)	教室	一般スキーヤーおよびアルペン競技者、スノーボード競技者(小学生~一般)	6月、8月、10月で各1回、計3回	長岡市体育館、妙高市妙高ふれあいパーク
40	清水	清水マリンフェスティバル	ドラゴンボート	大会	海洋スポーツ愛好者、一般市民	7月19日	清水港 日の出埠頭
41		第11回ジュビロ磐田メモリアルマラソン	マラソン	大会	一般	11月29日	磐田スポーツ交流の里 ゆめりあ
42		第3回ジュビロ磐田ミニバススクール	ミニバスケット	教室	小学3~6年	通年	浜松アリーナ
43	磐田	ジュビロヨガクラブ	ヨガ	教室	18歳以上の男女	通年(10回×4セット)	磐田市体育館 他
44		ジュビロ磐田ソフトバレーボールクラブ	ソフトバレーボール	教室	18歳以上の男女	通年(月1回)	磐田市体育館 他
45		ジュビロ磐田ソフトエアロビクスクラブ	エアロビクス	教室	18歳以上の男女	通年(月1回)	磐田市体育館 他
46	京都	京都サンガF.C. ビーチサッカーフェスタ2009 in 網野	ビーチサッカー	大会	小学4年以上の男女	7月5日	網野町夕日ヶ浦海岸
47		京都サンガF.C. タグラグビー教室2009	タグラグビー	教室	小学生	10月17日	京都サンガF.C.人工芝グラウンド
48		京都サンガF.C. ハンドボール・サッカー教室	ハンドボール、サッカー	教室	小学生	2010年2月13日	田辺中央体育館
49		第33回京都府家庭婦人バレーボール連盟 京都サンガF.C.カップ 秋季リーグ戦	バレーボール	大会	京都府家庭婦人バレーボール連盟登録チーム	8~9月(8日間)	京都府立体育館 他
50		京都サンガF.C. キッズチアリーダースクール	チアリーディング	教室	幼稚園年中(5歳以上)から小学6年まで	通年(2009年1月~)	京都市西京極総合運動公園陸上競技場兼球技場
51	G大阪	ガンバ大阪精神障がい者アカデミー	障がい者サッカー	教室	ホームタウンエリアに住む精神障がい者の方	通年	万博人工芝グラウンド、万博フットサル場
52	神戸	フェスピック神戸大会記念日本障がい者サッカー親善大会	障がい者サッカー	大会	フェスピックチーム、神戸市内マサムネチーム、フェリス学院及び育成事業本部コーチ、兵庫県サッカー協会、財団法人神戸市障がい者スポーツ協会	9月5、6日	神戸市しあわせの村
53	広島	トップス広島 スポーツクラブ	バドミントン、バレーボール、バスケットボール、テニス	教室	小中学生の男女	通年(週1回)	ひろぎんの森、広島県スポーツ会館
54	愛媛	愛媛FC レディースEnjoyフィットネス教室	フィットネス	教室	女性(18歳以上)	通年(週1回)	愛媛フットサルパーク
55		愛媛FC 精神障がい者サッカー教室&サッカー大会	障がい者サッカー	大会、教室	精神障がい者	通年(全18回)	愛媛フットサルパーク、松山記念病院体育館
56		アビスパ福岡視覚障がい者サッカー支援活動	障がい者サッカー	チーム、教室	視覚障がい者	通年	福岡県立福岡高等盲学校
57	福岡	アビスパ福岡タグラグビーフェスタ	タグラグビー	教室	小学生	11月15日	福岡フットボールセンター
58		第3回アビスパ杯ドッジボール大会(アビドッジ)	ドッジボール	大会	小学生	10月25日	福岡市東区東体育館
59	大分	大分トリニータビーチサッカーフェスティバル2009	ビーチサッカー	大会	小学生以上	7月18、19日	姫島海水浴場
60		大分東リトルシニア	野球	チーム	中学生	通年	大分市内・由布市内野球場、県内小学校グラウンド
61		大分トリニータ 知的障がい者サッカーリーグ、教室	障がい者サッカー	大会、教室	知的障がい者・児、養護学校、養護施設	通年	大分スポーツ公園人工芝グラウンド
62		大分トリニータ スポーツ教室	サッカー、バスケットボール、バレーボール、タグラグビー	大会	小学生(高学年)	9月13日	大分県サッカー協会人工芝グラウンド

23 横浜 F・マリノス



選手の自主性と熱意が縮めた ファン・サポーターとの距離



ファン感謝デーのイベントへ子供たちと一緒に参加。選手たちが自発的にファン・サポーターとの距離を縮めようとする姿勢が目立つ
©横浜F・マリノス



松田選手 ©横浜F・マリノス

次に向かうべき道筋を見いだす

横浜、みなとみらいの一等地。よく手入れされた、青々としたピッチ4面が広がるマリノスタウンに、子供たちの歓声が鳴りやまなかった。2008年10月11日、横浜F・マリノス選手会が初めて主催した小学生向けのサッカー教室は、大成功のうちに幕を閉じた。それは単に、未来のJリーガーを目指す子供たちに夢の入り口を開いただけではない。長く迷走を続けた名門が、次に向かうべき道筋を見いだした、大きな意味をもつ1日でもあった。

1993年。満を持してスタートしたJリーグの開幕カードに名を連ねた。2003、2004年。岡田武史監督の下、2年連続リーグ戦年間優勝の偉業を成し遂げた。大都市・横浜に拠点を置き、伝統と実績を兼ね備えた名門。だれもがうらやむそんなクラブ像こそが、F・マリノスのイメージだ。「スター選手がいる。優勝も経験した。何もしないでもお客さんが来てくれるというのが、当時のマリノスの当たり前だった」。1995年に加入し、この15年間、常に主力として活躍を続けてきたDF松田直樹は、そう言って栄光の時代を振り返る。

しかし、盛者必衰のことわりからは、ハマの名門も逃れることはできなかった。2004年のリーグ制覇を最後に、タイトルから遠ざかることはや5年。毎年中位に甘んじるようになった成績と歩調を合わせるように、年間チケットの売り上げも伸び悩むようになる。「冷たい」「気取っている」「選手との距離が遠い」一。強かったころ

のおごりにも似た姿勢が、ファンの足を一層、スタジアムから遠ざけた。

そんな悪い流れに歯止めをかけたのは、危機感を抱いた選手の自主性であり、熱意。選手会長も務める松田直樹は言う。「横浜はほかのプロスポーツクラブもあるし、娯楽がたくさんあるという意味でもほかのクラブに比べて環境は本当に厳しい。でも、サッカーは自分がやっているということを差し引いても、一番面白いスポーツだと思っている。まずはサッカーの楽しさを純粋に知ってもらうことから始めたかった」。冒頭のサッカー教室の計画はこうして立ち上がった。

シーズン真ただ中でありながら、現役選手が手取り足取り、計400人の小学生を指導する。普段からサッカー教室で子供たちを指導している「プロ」のコーチスタッフに教わりながら、子供たちが年齢に応じて楽しめるようメニューにも工夫を凝らした。当時、トップチームの成績は13位で、J2降格の危機とは背中合わせの状況。だがこの日、選手もファンもスタッフも、紛れもなく一つになっていた。そしてこの後、チーム成績は急激な上昇カーブを描き、9位でシーズンを終えることになる。

「いい成績に、いい循環に」

日々の練習後には必ず、ピッチ脇にファンサービスエリアが設けられる。選手たちは額に光る汗もそのままに、自主的に足を運んでファンと

のつかの間の交流に興じる。シーズン前に開催されるファン感謝祭にしても、大きく様変わりした。練習の合間を縫って選手自らイベント内容を企画し、芸人さながらの完成度の高いステージを披露してファンを喜ばせるのが、毎年の恒例になった。そこにはお高くとまっていた、かつてのエリート集団の姿はない。ファンとの距離は、確実に縮まっている。

選手が起こしたムーブメントは、ファンとの間にとどまらない。午後の練習を終えたトップチームの選手が、すぐ隣りで行われている育成組織の練習に飛び入り参加する姿も、今では珍しくなくなった。時にはジュニアユースからトップまでが参加する合同練習も行われ、そこにはトップの監督すらも顔を見せる。数多くのプロ選手を輩出した実績をもち、3,500人というJ屈指の規模を誇る育成組織と、トップチームとの垣根はもはやなくなりつつある。マリノスタウンという最高のインフラが物理的な距離を縮め、選手の熱意がそれを実のあるものへと昇華させてゆく。

迎えた2009年。チームは開幕から厳しいスタートを切ったが、クラブとしての方向性はぶれていない。松田は言う。「徐々に選手もファンもスタッフも一丸になれている気がする。選手がピッチで成績を残せばさらに一体感が出るだろうし、逆にそのことがいい成績につながることもある。いい循環になっていくと思う」。都市型の名門クラブがまとう、新たなイメージ。この街には、横浜F・マリノスがある一。2007年に掲げたこのキャッチフレーズが、徐々に現実味を帯び始めた。

(神奈川新聞社 鈴木 陸夫)



トップチームの選手もサッカー教室や育成組織の練習へ積極的に参加(写真は山瀬功治選手) ©横浜F・マリノス

スポーツを通じて豊かな社会の創造を目指す「Jリーグ百年構想」の実現に向けて、JリーグとJクラブはさまざまな施策を展開している。その活動の最前線ともいえるJクラブは、それぞれのホームタウンを中心に、地域の特徴、実情などに応じて多彩なプログラムに取り組む。地域に根差し、活力を与え、クラブも刺激を受ける、こうした活動を紹介するシリーズの12回目は、横浜F・マリノスと東京ヴェルディにスポットを当てた。



24 東京ヴェルディ



育成組織も地域貢献活動に参加。 人間教育こそが育成の本質

原点への回帰という選択

クラブ創立から今年で40周年を迎える東京ヴェルディ。前身である読売サッカークラブの時代から、実力と人気を兼ね備えた名門クラブであり、日本代表選手を多数輩出。スタジアムはいつもたくさんのファン・サポーターであふれていた。

権威と伝統を誇るこのクラブは、設立当時から育成に力を入れ、トップチーム以下、ユース、ジュニアユース、ジュニア、女子チームであるベレーザ、メニーナというピラミッド型の編成を確立してきた。その一貫した育成システムは、国内屈指と評価が高い。また、Jリーグ開幕の1993年、東京都稲城市のよみうりランド内に造られたクラブハウスには、美しい天然芝と人工芝のピッチが計4面、設置されているほか、メディカルルームや設備の整ったトレーニングルームなどを備え、サッカー選手にとって最高の環境が提供されている。トップから育成組織、女子チームまで、全ての選手がこの施設を共用しているため、トップがユースにアドバイスをしたり、ベレーザとトップと一緒に筋力トレーニングを行ったり、トップの選手が使わなくなったスパイクを育成組織の選手に譲るなど、お互いに交流を図り、刺激を与えながらクラブの一員としての一体感を持つことができる。

しかし2006年、この理想的ともいえるクラブがJ2へ降格。08年にJ1へ復帰するものの、わずか1年で再びJ2で戦うことを余儀なくされてしまった。そこには、さまざまな要因が考えられる。もともと育成システムがしっかりしていたにもかかわらず、外部からの優秀な選手によってトップチームを編成していた結果、世代交代が円滑に行われず、経営的にも厳しい状況に陥ったことと合わせ、それまでのようなチーム編成が難しくなったことも一因だろう。

このような状況の中でクラブが選択した打開策とは、「育成組織からトップチームの選手を育てていこう」という原点への回帰だった。1人でも多くの選手をトップチームに上げることにこだわり、いかにプロ選手として活躍できる環境をつくれるか。スムーズな世代交代こそが



目黒川沿いの道で清掃活動を行うジュニアチームの選手たち。こうした活動を通じてホームタウンへの思い、理解をはぐくみ、社会性も身につけていく
©東京ヴェルディ

名門クラブの復活へつながらずと信じ、勝澤健強化部長／渉外・編成部長は「子供のころからヴェルディが大好きで、このよみうりランドでサッカーをやってきたという選手たちでチームをつくりたい」と熱い思いを語る。



勝澤 部長

ぶれることのない意思の共有

東京Vが育成において特に大切にしていることに、「栄養」「安全」「睡眠」の3つがある。育成組織の選手たちは、練習が終わるとすぐにクラブハウスで食事が提供され、年少者は帰宅の際、最寄り駅までバスで送迎されるシステムが整っている。夏休みなどには早い時間から練習を始めて、少しでも多くの睡眠時間が確保できるように、ピッチの効率的な活用が考えられている。また「たとえプロサッカー選手になれなかったとしても、その後の人生において東京ヴェルディでサッカーをやったという誇りを持ってもらえるような環境を提供していきたい」と勝澤部長が話すように、ユースの中には通信制高校で学びながら、あるいはクラブと提携する高校に通いながら練習に励む選手がお

り、サッカーだけでなく学校生活も大事にしているという。

さらに、東京Vはトップチームだけでなく、育成組織の選手たちを地域貢献活動に参加させている。ジュニアチームは毎年、地元のサッカー少年団やロータリークラブと一緒に目黒川の清掃活動に参加している。若い選手たちにも地域貢献活動を体験させることで、ホームタウンへの思いが強くなり、また人間教育にも役立つという。そもそも東京Vの地域貢献活動は歴史が古く、年間300件近いという回数はJリーグでもトップクラスである。トップチームも8年ほど前から多摩川の清掃活動を行っているが、その精神の基礎はジュニアのころから養われているのだろう。「人間教育こそが育成の本質」と勝澤部長は語る。

今年、東京Vは節目の年を迎え、クラブ関係者全員が現状と真摯に向き合っている。監督・選手・全スタッフが、ぶれることのない意思の共有を図り、一丸となって育成から取り組む姿勢が見えた。遠回りで時間もかかるように思えるが、近い将来、それが確かな道のりであったと振り返る日が来ることだろう。

「かっちゃん、育成、もう一回やっぺいこうよ」——勝澤部長に言ったラモス瑠偉前常務の言葉が未来へとつながっている。

(共同通信社 谷口 直子)



動き出した「大きな器」

モンテディオ山形の J1リーグ昇格が県内にもたらしたインパクト

山形新聞社◎ 稲村 裕介

「カントク〜、頑張ってください〜」。山形にもようやく春の陽気が漂い始めた4月上旬。クラブハウスから練習場へと歩いていた小林伸二監督に、散歩中のおばあちゃん2人が拍手と黄色い声援を送った。照れくさそうに会釈する小林監督。「よく監督って気付きましたね」。そう聞いた記者に、2人はちょっとだけムツとした表情で答えた。「あたりまえ(当たり前)だべす。応援してんだがら」。

1999年のJ2加入から苦節10年。モンテディオ山形がついにJ1に戦いの舞台を移した。多くの期待を背負ったチームは開幕戦で歴史的な大勝を挙げ、3月は1勝1分け1敗の好スタート。まだまだシーズンは始まったばかりだが、厳しい下馬評を覆すような戦いぶりを見せている。歓喜のJ1昇格からクラブ史上初の国内最高峰の舞台へ。この強烈な「インパクト」は、県内にもたらした変化をもたらしている。

昇格決定後の昨年12月から、草の根運動的に展開されている募金支援。自治体を皮切りに始まった取り組みは、今では民間企業から個人にまで活動の輪は広がっている。3月19日現在、寄せられた善意は総額

3,000万円。チームを運営する社団法人山形県スポーツ振興21世紀協会の海保宣生理事長は驚きを込めて話す。「正直、昇格というものが通用するのは3カ月間くらい思っていた。それが今なお続いている」。

県内各地に募金箱は設置されているが、直接、チームに自分の気持ちを届けたい。「わずかばかりですが」。熱い思いを抱いたファンが直接、クラブに足を運んで募金を渡す姿も見られた。匿名の封筒で現金が寄せられることもあるという。

練習場の光景も明らかに変わった。昨季まで平日の見学者は数人程度。それが今は数十人ほどまでに増えている。首都圏などの人気クラブでは珍しくないかもしれないが、ここ山形では大きな変化。磐田での開幕戦の翌日、地元に戻ったチームの練習に駆け付けたファンは約300人に上った。月曜日に行われた3月30日の練習試合には200人が熱視線を送っている。

だがこれらの盛り上がりは、まだまだ入場者数増には直結していない。晴天の下、4月5日に行われた第4節、ジェフユナイテッド千葉戦の入場者は9,172人。後半終了間際



苦節10年。待ちに待ったJ1の舞台。ホームスタジアムには多くの希望があふれている ©山形新聞社

に決勝点を挙げる劇的な勝利に沸いた一方で、空席が目立つスタンドには物足りなさが残った。

県民の関心は間違いなく高まっている。NHKで全国中継されたホーム初戦の名古屋グランパス戦(第2節)。雪中の激闘となった一戦で、県内の視聴率は28%を記録したという。「あの試合を見て関心を抱かなかった人はいないはず」と海保理事長。現在、高齢者などを呼び込むため手売りのチケット購入所を増やすなど、新規ファンの獲得に地道な努力を続ける。

いくつものクラブで指揮を執った小林監督は、開幕前、本県のサッカー人気についてこう表現したことがあった。「山形県は例えるなら大きな器だと思っんです。動き出すと全部が大きく回る」。昇格という「起爆剤」によって、今はその器が徐々に回り出したばかりなのかもしれない。シーズンが進めば進むほど、誰もが想像もしていなかった盛り上がりを見せるはず。さまざまな変化を肌で感じ取りながら、今はそう信じている。



練習場に足を運んだファン・サポーターにサインをする選手たち。昇格を機に、練習見学者は増えている ©山形新聞社